

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第6回現代龍馬学会総会・研究発表会

～6年目 学会の在り方について～



会長 片岡 雅文

県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は2009年の発足から数えて6年目に入り、ことしも高知市浦戸の桂浜荘で、総会と研究発表会を開きました。

外へ向け、
鮮明で活発な学会へ

総会では理事のお一人から、学会の在り方について厳しい指摘がありました。

「学会の活動が停滞しているよう見える。会員が増えないし、研究発表会への参加者も少ない。単なる歴史愛好家の趣味の会になっているのではないのか？」もっと会員の数を増やし、外へ向けて発信していくような学会にしていかねばならない」

確かにご意見通りで、今までいいはずがない。会員の裾野を広げ、活動をいつそう鮮明で活発なものにし、学会の存在を多くの人たちに知つてもらえるようにしたい。肝に銘じて、これからも努めていきたいと思います。

ひきつづいて開かれた研究発表会は、県内外から102人の参加があり、例年に増して熱の



参加者から熱心な質問相次ぐ

龍馬に学ぶ
新しいヴィジョンと
哲学

ことしのテーマは「変革のとき」でした。断るまでもなく、龍馬が生きた幕末維新期と私たちが生きている平成の現代とを重ね合わせ、イメージしたもののです。

むろん、

変革を必要としない時代は

あります。しかし、現代ほど国家や社

会の在り方、私たち一人一人の生き方

が問われている時

代はないでしょう。

世界史の視点で

見れば、冷戦終結につづくアメリカ独

り勝ちの時代が終

わり、国家間の新

たな対立をはらん

だ不安と混沌の時

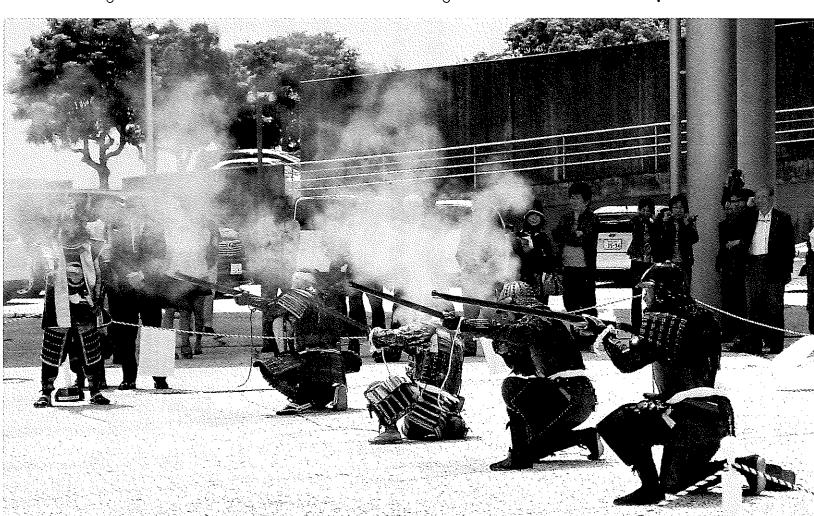
代に入っています。

いる。これはありがたいことです。

東日本大震災によってそれまでの国家観、文明観を揺さぶられ（特に原子弹に依存した文明構造を見なおし）、新しいヴィジョンと哲学を必要としています。

それは150年前、龍馬が姉乙女に宛てて書いた手紙の有

名な言葉、「日本を今一度せんたく（洗濯）いたし申候事」にほかりません。そしてそこに、私たちが龍馬の思想と行動に学ぶ意義があるように思われます。



迫力満点の“長宗我部火縄銃鉄砲隊”の実演＝八策の広場で

こぼれ話一 犬歩棒当記（十八）

犬歩棒當記（十八）

御用捨無之方

宮川
禎一

龍馬の人柄を知るひとつの方法は同時代人が彼をどう評したのかを読むことだ。桂小五郎が龍馬にあてて書いた手紙が残っている。慶応二年二月二十二日の書状（京博蔵）だ。このなかで桂は龍馬のことを「大兄は心が公明で御量が寛大なのにまかせて『兎角御用捨無之方ニ御座候得共』（今は）狐や狸の世界か、山犬や狼のうろつく世間かといった不穏な世の中ですので、少しは光が見えるようになるまでは必ず必ず何事もご用心下さい」と書いている。

筆者はこの「御用捨之無き方」という表現に引っかかっているのだ。拙著『全書簡現代語訳』坂本龍馬からの手紙では「用捨」を「用心」と訳した。「とにかく用心」というものをお持ちでない方なので」という意味かと思つていいたのだ。

用捨＝容赦では、「容赦の無い方」すなわち許容の人のような語に感じたからだ。しかしながら桂の手紙では「用捨」と「用

佳小五郎書簡 慶應二年二月二十二日付
本龍馬あて(部分) 京都国立博物館蔵(重文)」

心」とは使い分けられていて、捨てると「用捨」を辞書で調べると、「(1)用いることと捨てる」と。取捨。転じて善悪などの判断を下すこと。
と。(2)ひかえめにすること。
遠慮すること」さらには転じて「手加減」へ続くようだ。
桂が龍馬を「御用捨之無き方」と評した意味は(2)
人の「遠慮やひかえめの無い
人」という意味かと思われる。
文脈は「公明・寛大」
(+)に対して「用捨がない」
(二)が置かれている。桂は
寺田屋での事件を知つて「龍
馬の極端すぎるほどの隔意
の無い性質」をマイナスに
評価したのである。「用心
のない方」という訳では意
味が狭かつたようだ。「自分
の命への遠慮までが無い方」
という意味だろう。万事き
わめて用心深い桂小五郎ら
しい龍馬評である。

コラム・龍馬のこと

「徒然なるままに、御手洗にて思う」

現代龍馬学会副会長 坂本 世津夫

「龍馬のこと」などまるで知らない私が、現代龍馬学会の副会長をやっている。これで良いのかとも思うが、単に姓が坂本で、坂本龍馬のご先祖がいた才谷が我が家すぐ近くだったから、こうなったのだろう。432年遡って本能寺の変の頃は、我が坂本家の先祖もクロスする部分があるのではないかと思い、実は坂本龍馬ではなく明智光秀や長宗我部元親のことを少しだけ調べている。そんな中、3月に広島県呉市豊町大長にある豊公民館の豊老人大学事務局から坂本龍馬に関する話をして欲しいという依頼が届いた。何も考えずに演題を「明智光秀と龍馬」としてしまった。「時は今 天が下しる 五月かな」、これは天正10年（1582年）5月に明智光秀が「本能寺の変」の直前に詠んだ百韻連歌の発句（第1句目の歌）である。それから432年が過ぎた今、明治維新と同様に再び日本は「変革のとき」を迎えている。この時代の流れを、明智光秀と坂本龍馬という軸から考えてみたいという内容だった。しかし、話を詰めていくうちに実は大長と隣接する御手洗は長州と芸州による御手洗条約が締結された頃、よく密談の場所として使われていたということである。そして龍馬も立ち寄っているはずだということである。しかし、確固たる証拠がない。秘密会議の場所ならば、宿帳に名前を書いたり、ここに居たという証拠は多分残さないだろう。学会とか歴史は、証拠がなければなりたたないものである。現代龍馬学会の原点もそこにある。反面、想像は重要である。トロイ遺跡を発見したシュリーマンの時代にはインターネットという手段はなかったが、今では大いに活用できる。各地から発信されている情報に耳を傾けることも重要ではないか。そして状況証拠を積み重ねることも重要ではないかと考えている。そうは言っても、やはり重要なことは、正しい仮説を立てて、地域に足を運んで実証していくことである。そして、現在としては証拠を残していく作業が必要である。それは、論文であったり、日記であったり。

“話してみるかよ”

「思いがけない出会い」

現代龍馬学会理事 記念館学芸主任 前田 由紀枝

5月、ウィーンでの「平和の炎賞」授賞式。会場は、120人の参加者で心地よくざわめいていた。ハバスブルクさんたちウイーンの人だけでなく、日本大使館員はじめ現地の日本人も多くいた。

宴も終わりかけのころ、私は近くで“龍馬記念館”“国沢新九郎”という言葉が繰り返されていることに気づいた。

ふと、通訳を務めてくださった近藤愛弓さんと目が合った。彼女ははにかんだように「実は、私の曾祖父が国沢新九郎なんですよ」と言った。

話を聞くと、新九郎の弟・新兵衛、直系の曾孫さんだという。「父は新兵衛の孫。新兵衛は満鉄会長から日本通運初代社長を務め、新九郎の遺児の面倒も見ました。私の祖母、つまり父の母が新兵衛の娘なのです。父は太伯父・新九郎のことをよく調べています」。

私はびっくりした。30歳という若さで亡くなった新九郎のご子孫が、ウィーンにいたのである。高知から飛行機を乗り継いで、19時間。ほぼ一日がかりのフライトだった。こんな異国に、幕末土佐人のご子孫がいるとは、夢のようだ。

国沢新九郎（1847～77）は、高知市越前町の人で、龍馬が「船中八策」を起草したといわれる土佐藩船・夕顔の艦長も務めた。維新後、高知藩留学生としてロンドン留学。修学目的を法律から洋画に転じて、帰国後に画塾『彰技堂』を起こした、日本洋画界草分けの人である。龍馬記念館には新九郎の描いた龍馬の油彩肖像画もある。

愛弓さんは父・常恭さんを、私に紹介してくださった。父娘二人はよく似た面立ちで、新九郎の肖像画にも顔が重なった。『パレットの影～或る先駆者の生涯』という常恭さんの書いた冊子もいただき、改めて新九郎に触れることができた。常恭さんも若くしてヨーロッパに渡り、ベルリンからウィーンでの暮らしが40年余りになるという。

私は改めて、龍馬の生家に近い大膳公園（高知市大膳町）にある、新九郎の生誕地碑を見に行きたいと思った。

高知県立坂本龍馬記念館

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
<http://ryoma-kinenkan.jp>